

〈惠慶百首〉秋部試注

黒木 香・今井 明・米谷悦子・竹田正幸
田坂憲二・南里一郎・西原一江・福田智子

凡 例

- 一、歌番号 注釈のはじめに、惠慶百首における通し番号を示し、あわせて（ ）付きで資経本惠慶集における歌番号（『私家集大成』中古I所収「惠慶集」の歌番号と一致）を示す。
- 二、本文 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』（二〇〇三年十二月刊）所収、資経本惠慶集とする。漢字仮名の区別、仮名遣い、おどり字も底本のままとし、濁点も付さない。
- 三、校異 『惠慶集校本と研究』（熊本守雄氏、桜楓社、昭和五三年）に収められた以下の影印本を用い、語の異なりのほか、表記の違いも示す。
○書陵部一五〇・五五八本 略称（書古）
○越桐喜代子氏蔵（前田家旧蔵）本 略称（前）
- 四、語釈 見出し語は、底本の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣いに改めたり、濁点を付したりする必要のある場合には、見出し語の次に（ ）を付けて示す。
- 五、別出 歌集の名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、詠者名、歌、左注を、順に列挙する。

六、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集名・部立・歌番号・詠者名・詞書）とする。

注 釈

二一（二二六）

【本文】

後拾 あさちはらたまゝくゝすのうら風のうらかなしかるあきはきにけり

【校異】 ○後拾―後（前） ○うら風―うらかせ（書古） ○あき―秋（前）

【語釈】 ○あさちはら（あさぢはら） 浅茅原。丈の低いチガヤが生えた野原。 ○たまゝくゝす（たままくくず）

「たままく」は「玉巻く」。葛の若葉の先がくるっと巻いていることをいう。 ○うら風 葛の葉を裏返して吹く風。「うらがなしかる」の「うら」（心の内）と響かせている。 ○うらかなしかる（うらがなしかる） 「うらがなし」は心の内で悲しいと思う、もの悲しく思う。

【通釈】

浅茅原に生えている、先をくるりと丸く巻き込んだ葛の葉を、裏返すように吹く風の、その「うら」ではないが、うら悲しい（もの悲しくなる）秋がやってきた。

【別出】

『後拾遺和歌抄』第四、秋上、二二六番

（秋たつひよめる）

惠慶法師

あさぢはらたままくくずのうら風のうらがなしかるあきはきにけり

『新撰朗詠集』一九二番

（秋）

(早秋)

浅茅原玉巻く葛の裏風のうら悲しかる秋はきにけり 惠慶

『相撲立詩歌合』三七番

十九番掖 右

惠慶法師

あさぢ原たままく葛の浦風にうらがなしかる秋は来にけり

『奥儀抄』中积、二〇六番

あさぢはらたままく葛のうらかぜのうらがなしかる秋は来にけり

『和歌色葉』下卷、三七五番

(後拾遺)

あさぢはら玉まくくずのうら風のうらがなしかる秋は来にけり

『定家八代抄』卷第四、秋歌上、二七五番

(題不知)

(惠慶法し)

^後浅茅原玉まく葛のうら風もうらがなしかる秋は来にけり

【考察】

当該歌には別出が多い。初秋の涼しく気持ちのよい風が吹き渡っている情景だが、心の中には、「はるののにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも」(万葉集・卷十九・四二九〇・大伴家持・廿三日依興作歌二首)や「うらうらにてれるはるひにひばりあがりこころかなしもひとりしおもへば」(万葉集・卷十九・四二九二・大伴家持・廿五日作歌一首)にも通う哀しみがある。

「あさぢはら(浅茅原)」は、『万葉集』に「あさぢはらつばらつばらにもものもへばふりにしさとしおもほゆるかも」(万葉集・卷三・三三三三)、「やまたかみゆふひかくりぬあさぢはらのちみむためにしめゆはましを」(万葉集・卷七・一三

四二) など六例あり、惠慶以前には他に、元良親王の「たのむれどしたのころはあさぢはらつゆにぬるればいろかはるとか」(元良親王集・八二)が見えるが、勅撰集では惠慶の「あさぢはらぬしなきやどの桜花心やすくや風にちるらん」(拾遺集・春・六二・惠慶・あれはてて人も侍らざりける家に、さくらのさきみだれて侍りけるを見て)が初出である。その後、「あさぢはらあれたるやどはむかしみし人をしのぶのわたりなりけり」(後拾遺集・雑一・八九三・能因・陸奥にまかりくだりけるにしのぶのこほりといふところにはやうみし人をたづねければそのひとなくなりけりとききて)といった歌が、多く詠まれていく。

「葛」も歌によく詠まれ、「秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな」(古今集・恋五・八二三・平貞文・題しらず)や「神な月時雨しぬらしくずのはのうらががるねに鹿もなくなり」(拾遺集・冬・二一八・よみ人しらず・題しらず)では「うら(裏)」とともに詠まれている。だが、「浅茅原」と「葛」をともに詠みこんだ歌は惠慶の当該歌しか見えない。

「たままくくす」(玉まく葛)について、藤本一恵氏は惠慶の新造語であることを指摘し、「景と情のみごと」に詠みこまれた秀歌である」と評している(『講談社学術文庫 後拾遺和歌集全注釈(二)』)。「たままき(玉纏き)」という歌句は万葉時代からあり、玉を巻いて飾るという意で用いられたが、平安時代以降「葛の新しい葉が巻葉になっているのに限って詠まれるように変化する。この固定化はほぼ厳密に守られた」(『歌ことば歌枕大辞典』「玉巻く」滝澤貞夫氏)といい、惠慶が当該歌で使用した歌句が使用されるようになっていく。惠慶に近い時期の例歌に、「こなたしもなびきおとれる花すすき玉まく葛のまくるなるべし」(源順集・一三二)や『宇津保物語』に「白露に色かはりゆく秋はぎは玉まく葛もかひなかりけり」(忠こそ・一条北の方)がある。

「うら風」も早く伊勢や斎宮女御の歌にも見られるが、「浦風」として海や水辺と関わらせて詠まれるのに対し、惠慶の歌は「裏風」(葉の裏を返す風)として独自の詠みぶりになっている。

一方、「あきはきにけり」で終わる歌には「このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり」(古今集・秋

上・一八四・よみ人しらず・題しらず)や「葦引の山の山もりもる山も紅葉せさする秋はきにけり」(後撰集・秋下・三八四・紀貫之・もる山をこゆとて)などの先行歌があり、恵慶にも「やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそみえねあきはきにけり」(恵慶集・一〇九・あれたるやど)がある。

歌によく詠まれる表現を用いてはいるが、一つ一つの言葉を子細に見るならば類例が少ない詠みぶりになっている。万葉歌に見られる言葉を独自のものに変化させ、見馴れた表現と目新しい表現との組み合わせに工夫が見える。また、「たま」「まく」「くず」、「うらかぜ」「うらがなしかる」と同音を重ねて、独特の響きを出している。

三三 (三二七)

【本文】

ひとりねのよころもけさははたさむしさほのかはきりたちやしぬらん

【校異】 ○けさははたさむしーいまはゝたさむし(前)

【語釈】 ○ひとりね 一人で寝ること。 ○よころも (よごろも) 夜衣で、夜着のこと。和歌では「さよごろも(小夜衣)」を用いるのが一般的である。「夜頃も」(このところ幾晩も)の意を含めるか。 ○はたさむし(はださむし) 肌をいう。早くから歌に詠まれ、「千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく」(古今集・賀・三六一・索性・秋)や「あか月のねざめのちどりたがためかさほのかはぎりたちかへりなく」(能宣集・一二三)など千鳥と共に詠まれることも多かった。 ○たちやしぬらん 「や」は疑問の係助詞、「ぬ」は完了の助動詞、「らん(らむ)」は現在推量の助動詞。立ち上っただろうか。

【通釈】

ひとりっきりでかけて寝ている夜着も今朝は肌寒く感じられる。こんな朝には、佐保川の霧も立ち上っていることだろう。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第十三、秋部四、五三五八番

(霧)

百首歌中

惠慶法師

ひとりねの夜衣いまやはだ寒しさほの川ぎり立ちやしぬらん

【考察】

第二句の異文について整理しておく。まず、「けさ」（『惠慶集』底本・書陵部本）と「いま」（『惠慶集』前田家旧蔵本、『夫木抄』）との対立がある。一方、強意の係助詞「は」を用いる『惠慶集』諸本に対し、『夫木抄』は疑問の係助詞「や」になっている。

「よころも（夜衣）」は、和歌では「夜の衣」「小夜衣」と詠まれるのが普通である。『源宰相中将家和歌合』十五番の判詞に「左歌の、そでばかりをかへすとはべれば、夜衣と申すおなじ心にや」と見えているが、歌には「夜衣」の語は詠まれていない。「夜の衣」には「いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる」（古今集・恋二・五五四・小野小町・題しらず）や「せみのはのよるのころもはうすけれどうつりがこくもなりにけるかな」（友則集・五七・人のもとよりとのゐ物おこせたる、かへすとて）、「てもやまずわがくるいとをひこぼしのよるの衣におるや七夕」（うつほ物語・藤原の君・七七・民部卿の殿の御方）などの例がある。これに対し、「小夜衣」には古い例歌はほとんどないが、藤原実方に「うちかへしおもへばあやしきよごろもここのへきつつたれをこふらむ」（実方集・二六三・人のもとにいひつかはしし、うちに候ひしよ）の歌がある。「よころも」を「夜衣」と解する以外に、「夜頃も」とみて「幾晩も」の意とすることもできようが、和歌の用例はない。

「はだ寒し」は和歌に詠まれることはあまり多くないが、「たびころもやへきかさねていのれどもなほはださむしいもにしあらねば」（万葉集・卷二十・四三五一・右一首望陀郡上丁玉作部国忍）の他、「あさばらけをぎのうはばの露みれば

ややほださむしあきのはつかぜ」(好忠集・一九二・七月)、「ほださむくかぜはよごとになりまさる我が見し人はおとづれもせず」(好忠集・二三三・八月中)、「…よもにふきくる　こがらしの　ややほださむく　なるまでに…」(好忠集・一八五・秋)などがある。『好忠集』に三首集中して見られる点、注意される。

歌意はわかりやすいが、「夜衣」「はだ寒し」など和歌ではあまり詠まれない表現を用いている。「ひとりね」と「さほ(佐保)」とを組合せて詠んだ歌も、近世の歌を除けば「冬くればさほの河せにゐるたづもひとりねがたきねをぞなくなる」(後撰集・冬・四四六・題しらず・よみ人も)にしか見られない。

二三 (三二八)

【本文】

ふくかせにすまひやすらん神なひのく^{うらて}らみの山のみねのもみち葉

【校異】 ○ふくかせ―ふく風(書古) 吹く風(前) ○すらん―すらむ(前) ○く^{うらて}らみの山―うらこの山(前) ○もみ

ち葉―もみちは(前)

【語釈】 ○すまひ 争い抵抗すること、負けまいとして張り合うこと。紅葉が風に散らされないように抵抗していること。

○神なひ 神奈備。神のいらっしやる場所、特に神霊が鎮座する山や森をいう。飛鳥、三輪、三室などに言われることが多い。○く^{うら}らみの山 未詳。「く^{うら}らみ」であれば「暗み」が掛けられると思われるが、その場合も意味が繋がらない。傍書に記す「うらての山」は、紅葉が風に吹かれて裏が見えるというイメージから「裏ての山」か。別出の『歌枕名寄』は「占手山」と表記する。流布本の「うらごの山」は信濃国の歌枕(『和歌初学抄』『八雲御抄』)。

【通釈】

吹き散らそうとする風と争っているのであろうか、神南備のく^{うら}らみの山の峰の紅葉は。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第十五、秋部六、六一九六番

(紅葉)

家集、秋歌中

同(恵慶法師)

吹く風にすまひやすらん神なびのうらみの山の峰のみち葉

『歌枕名寄』卷八、畿内部八、大和国三、神南備篇、二五六三番

占手山

峰、紅葉

ふく風にすまひやすらん神なびのうらでの山のみねのみち葉

【考察】

吹く風に対して、散らないように、また折れないようにと争うものは、紅葉のほかに女郎花、桜、萱などが詠まれる。用例はいずれもそれほど多くはないが、中では女郎花と桜が特徴的である。前者は、「あきかぜにをれじとすまふをみなへしいくたびのへにおきふしぬらん」(後拾遺集・秋上・三二三・前律師慶暹)、「かくばかりはげしき野べの秋かぜにをれじとすまふ女郎花かな」(散木奇歌集・三九七)といったように、風になびく女郎花の様子をある程度写実的に描出し擬人化したものであろうし、後者は、「はがくれはしばしもすまへさくら花つひには風のねにかへすとも」(散木奇歌集・一三五)とあるように、散る桜を惜しむ類型の一つであろう。

第四句は「くらみの山」「うらでの山」「うらこの山」など揺れがあるが、いずれも決定性に欠ける。古本系の「くらみの山」は、他にこの用例を見ることができない。底本傍書の「うらでの山」は、時代は下るが肖柏に「むかはじよしらぬ心の行末をうらでの山の峰の松風」(春夢草・一四八七)の例がある。「心の行末」という語句とのつながりから考えて『歌枕名寄』の恵慶の和歌の表記の「占手山」の字を宛てるべきであろう。「こころ」「うら」という縁語仕立てもバランスの良いものである。逆に恵慶の当該歌は、占いと関連する内容ではなく、縁語関係も構築されておらず、「うらでの山」

とすべき必然性は見出せない。前田家旧蔵本に見える「うらこの山」は『和歌初学抄』『八雲御抄』に記されるが、信濃国の歌枕であり、また以下に示す用例を勘案しても、必ずしも適切とは言いがたいものである。すなわち「おぼつかないかに時雨るる空なればうらこの山のかたみなせなる」（散木奇歌集・五七六）、「たちぬはぬ錦とぞみるからころもうらこの山の秋のみぢば」（夫木抄・八五二五・後一条入道関白）などの例のように、「裏濃」という語であるから、染色・衣服に関連する表現を併用したり、紅葉の色づき方に関連させたりして詠まれている。恵慶の和歌の場合も、紅葉が詠み込まれているから一見妥当な表現のようであるが、この和歌の主題は紅葉の色ではなく、風と争って散らずに残っていることにあるのだから、やはり適切な表現とは言えない。定家は、紅葉を詠み込んでいることによって「うらこの山」と改めたのであろうか。

二四（二一九）

【本文】

もみちせぬいこまのやまのまきのはも秋はしたはそけしきはむらし

【校異】 ○いこまのやま―ときはのやま（前） ○まきのは―時はき（前）

【語釈】 ○いこまのやま 生駒の山。大和の国の歌枕。現在の奈良県生駒市にある標高六四二メートルの山。古来交通の要所でもあり、『万葉集』以来多くの和歌が詠まれている。時雨の名所ともされる。 ○まきのは 槇の葉。真木の葉。りっぱな木、杉や檜など良質の木材となる木、またはイチイ科の常緑高木。 ○けしきはむ（けしきばむ） 気色ばむ。様子が外に現れる。兆しが見える。ここでは少し木の葉が色づくことをいう。

【通釈】

紅葉することのない生駒山の槇の葉も、秋は下葉が少し色づくらしい。

【別出】

『万代和歌集』巻第五、秋歌下、一二〇五番

(題不知)

惠慶法師

もみぢせぬこまののやまのときは木もあきはしたばぞけしきづくらし

『夫木和歌抄』巻第二十、雑部二、八六五八番

こまのの山

秋歌中、万代

惠慶法師

もみぢせぬこまののやまのときは木もあきはした葉に気色づくらし

『夫木和歌抄』巻第三十六、雑部十八、一七一九八番

同(家集、秋歌中)

同(惠慶法師)

紅葉せぬこまのの山ときは木も秋は下ばぞけしきばむらし

『歌枕名寄』巻第十二、畿内部十二、河内国、射駒篇、三三五五番

槇

惠慶法師

もみぢせぬいこまの山のまきの葉も秋は下葉ぞけしきばむらし

【考察】

底本と前田家旧蔵本では「いこまのやま」と「ときはのやま」、「まきのは」と「時はき」という大きな対立が二箇所ある。

「紅葉せぬ」という言葉に下接するものとしては「ときはの山」の方が自然である。「紅葉せぬときはの山は吹く風のおとにや秋をききわたるらむ」(古今集・秋下・二五一・紀淑望)や「もみぢせぬときはの山にすむしかはおのれなきてやあきをしるらん」(拾遺集・秋・一九〇・能宣)をはじめとして多数の例があり、さらには、「もみぢせぬときはのもりこのまにもあきの色ある月ぞうつろふ」(雅有集・九五)のように、「ときはの森」などの例を派生させる。

一方【語釈】で述べたように、「いこま山」「いこまの山」「いこま岳」は「時雨」とともに詠まれることが多いため、鮮やかな紅葉との取り合わせも自ずから生じる。「難波とをこぎ出してみれば時雨ふるいこまの岳は紅葉してけり」（続後拾遺集・秋下・三九四・後九条前内大臣）、「紅葉をば霧なへだてそいこま山しぐるる雲は又もはれなん」（建保百首・四八六・兵衛内侍）などの例がある。結局、「紅葉せぬ」は「生駒の山」に直接掛かるのではなく「まきの葉」へとつながるのであり、紅葉しない槇の葉も、時雨の名所の生駒山では少し下葉が色づくという論理構造であろう。

『万代和歌集』『夫木和歌抄』に見られる「こまの山」は「いこまの山」を誤認・誤写したもののか。本文が変化する場合でも、安定感のある「紅葉せぬときはの山」という表現の本文を採っていないことは、これらの歌集が古本系の『恵慶集』を材料としたことの一つの証左であろう。なお「こまの里」（好忠集・一三〇）、「こまの原」（公任集・四七七）などは和歌に詠まれるが、「こまの山」の用例は他に見ることができない。

二五 (三三〇)

【本文】

かりかねはみねのやまやこえつらんかちかけたりとあまつこゑする

【校異】○みねのやま—みふねの山（前） ○こえつらん—こえくらむ（前）

【語釈】○かりかね（かりがね） もとは「雁が音」であり、転じて雁の異名となったとされる。 ○みふねのやま

「三船の山」または「御船の山」とも。大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡吉野町菜摘の南東にある山。吉野川をはさんで宮滝の東南に位置する。 ○こえつらん 今ごろ越えているだろう。 ○かちかけたり（かちかけたり） 「かち（楫）は、船を漕ぐために用いる道具。「楫をか（懸）く」とは、楫を船に取り付けること。雁の鳴き声を「カヂカケタリ」と聞きなした。 ○あまつこゑ 天つ声。和歌の例を他に見いだせない。『日本国語大辞典』第二版は「空に聞こえる声」として、当該歌を用例に挙げる。

【通釈】

雁は、三船の山をいまごろ越えているのだろうか。（三船の山ということ）「カジカケタリ（楫を懸けた）」と空から声が聞こえてくる。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第十二、秋部三、四八八五番

（雁）

家集

同（惠慶法師）

雁がねはみふねの山やこえつらんかぢかけたりとあまつこゑする

『歌枕名寄』卷第七、吉野篇、二二〇八番

（三船山）

惠慶

かりがねは三舟の山やこえつらんかぢかけたりとあまつこゑする

【考察】

三船の山を越える雁の鳴き声を、「船」がつく山の名にちなんで、「カジカケタリ（楫懸けたり）」と聞きなした歌である。鶯の鳴き声を「ヒトクヒトク（人来人来）」と聞きなした「梅花見にこそきつれ鶯の人く人くといとひしもをる」（古今集・雑体・一〇一一・よみ人しらず）という歌と軌を一にするが、雁の声をこのように聞きなした例は、管見では他に見出すことができず、惠慶独自の発想であると思われる。もっとも、当該歌のように、雁の鳴き声をそのまま引用し、掛詞として聞きなした歌は、『後撰集』に三首続けて配列されている。「往還りここもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりかりとなく」（後撰集・秋下・三六二）、「秋ごとにくれどかへればたのまぬを声にたてつつかりとのみなく」（同・三六三）、「ひたすらにわがおもはなくにおのれさへかりかりとのみなきわたるらん」（同・三六四）。いずれも、雁の鳴き声「カリ」に「仮り」を掛ける。『後撰集』の撰者、梨壺の五人のうち、清原元輔・大中臣能宣・紀時文に関しては、『惠慶集』にそ

の名が見え、また源順については、百首歌を通じて恵慶との密接な関わりが認められる。恵慶の当該歌の発想は、このような、当代を代表する歌人たちの間で、培われたものと推察されよう。

なお、「かりがね」は、本来は雁の鳴き声をいう語であるが、雁そのものを指す例も早くからあった。「秋風に山飛び越ゆるかりがねの声遠ざかる雲隠るらし」(万葉集・卷十・二二三六)や、「春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに」(古今集・秋上・二二〇・よみ人しらず)がその例である。

「三船の山」は、平安時代以降、「ほとんどの場合、その地名から『船』と見立てて詠まれた」という(『歌ことば歌枕大辞典』「三船の山」伊藤一男氏)。恵慶も、三船の山ということで「楫懸けたり」と詠む。ちなみに、「楫懸く」とは、船に楫を設置し、いつでも漕げるようにする意で、和歌の用例はなかなか見いだしたがたいが、『万葉集』に、「天の海に月の舟浮け桂楫懸けて漕ぐみゆ月人をとこ」(万葉集・卷十・二二三三)がある。

二六 (二二二)

【本文】

あきはきのしたはにつけておもふかなうかりし人の心はせたを

【校異】 ○あきはき―秋はき(前) ○おもふかな―おもふ哉(書古)(前) ○心はせたを―心はへをも(前)

【語釈】 ○あきはきのしたは(あきはぎのしたは) 秋の訪れを知らせる萩の下葉の紅葉。心変わりの表象。 ○つけて関して。ちなんで。 ○うかりし人 「憂し」は、いやだ、情けない、憂鬱だ。ここでは、自分をいやな気持ちにさせた人。無情だった人、冷淡だった人。 ○心はせたを この結句の形では解釈できない。ここは前田家旧蔵本や【別出】にある「心ばへをも」の本文に改訂すべきか。「心ばへ」は、心のさま、心の働き、性質。

【通釈】

秋になって色が変わる萩の下葉につけて思うものだよ、私にいやな思いをさせた人の心のさまを。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第三十六、雑部十八、一七二〇〇番

(言語)

同(百首歌中)

同(恵慶法師)

秋はぎの下葉につけておもふかなうかりし人のこころばへをも

『了俊日記』三〇番

恵慶

秋はぎの下葉につけておもふかなうかりし人のこころばへをも

【考察】

秋の訪れとともに、萩の下葉が紅葉していく様に、恋人の心変わりを重ねた歌である。

萩の下葉の色の变化は、人の心の表象として詠まれることが多い。人知れず思っていることが出てしまうことを「秋萩の下葉」に喩えた「人しれず思ふ心は秋はぎの下葉の色にいでぬべらなり」(兼輔集・四三)や、「人しれぬ思ひをすれば秋はぎの下葉こがるる物にぞ有りける」(信明集・一三〇)などの例がある。また、心変わりの表象としても詠まれ、「秋風にみだれてものはおもへども萩のしたばのいろはかはらず」(新古今集・恋一・一〇二六・藤原高光)、「秋はぎのしたばを見ずはわすらるる人の心をいかでしらまし」(拾遺集・恋三・八三八・広平親王・中将のみやす所のもとに、はぎにつけてつかはしける)といった例があり、当該歌は、これら二首と同様の発想に基づくものである。

「：につけて思ふかな」という歌句は、当該歌が初出のようである。ほぼ同時代の例としては、「さをしかのなくねにつけておもふかなをのへのはぎの花のさかりを」(大式高遠集・三五六)があり、やや時代は下るが、「たちのぼるけぶりにつけておもふかないつまたわれを人のかくみん」(後拾遺集・哀傷・五三九・和泉式部)の例がある。ただし、この歌句を用いた歌は少なく、『新編国歌大観』全体を検しても、十五首に過ぎない。

「憂かりし…」という歌句は、恵慶と直接贈答のあった中務の歌に「有りしだにうかりしものをあかずとていづこにそふるつらさなるらん」（後撰集・恋五・九五二・中務・左大臣につかはしける）や、「ころもだにへだてしよははうかりしにすだれのうちのこゑぞこひしき」（書陵部本中務集・二七四・としごろありて、人きてかへりて）があり、他にも同時代の例として、「としごとくにむかしはとほくなりゆけどうかりし秋はまたもきにけり」（後拾遺集・哀傷・五九七・源重之・秋みまかりにけるひとをおもひいでてよめる）が見出せる。

ただし、「憂かりし人」という歌句になると、当該歌が初出であり、ついで院政期の「かぎりなくうかりし人をあやにくにうれしとおもふをりもありけり」（重家集・一六七・初逢恋十首）が続く。「憂き人」ならば、「うき人のつらき心を此川の浪にたぐへてはらへてぞやる」（貫之集・五三九）や、「君をのみおきしまちの月見ればうき人しもぞ恋しかりける」（古今和歌六帖・三六三・ありあけ）他の例がある。

さて、結句の「心はせたを」は、「たを」の部分が解釈不能である。そこで前田家旧蔵本の「心はへをも」という本文を採り、【通釈】のようにした。ただし、「心ばへ」という語を用いた歌は他に管見に入らない。『了俊日記』では、当該歌の「心ばへ」の箇所合点を付しているという。荒木尚氏は、それを「非歌語」の例と位置付けている（『夫木和歌抄』卷三六「言語」考）（『今井源衛教授退官記念文学論叢』、昭和五十七年六月）。これに対し、底本の結句から「心ばせ」という語を読み取り、その用例を探すと、「いささめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつつ」（古今集・物名・四五四・きのめのと・ささ、まつ、びは、ばせをば）がある。その他、『檜垣姫集』に二首（一〇番・一一番、いずれも地名の肥後国「長谷」を詠み込む）、『散木奇歌集』に一首（九八六番）あるが、すべて物名歌である。いずれにせよ、原態を推定するに至らず、後考をまちたい。

二七 (二二二二)

【本文】

そめ人はつゆときゝしをからにしきみねのあさきりおのれたつらむ

【校異】○そめ人―そめひと（前） ○つゆ―露（前） ○きゝしを―きえしを（書古） ○あさきり―あきゝり（前）

○おのれ―をのれ（前） ○たつらん―たつらむ（前）

【語釈】○つゆ はかなく消えやすいものの比喩。また、主として秋の景物として季節感を託す。草葉を紅葉させるものと考えられていた。 ○きゝしを 「聞きしを」の意に解されるが、歌全体の意が通じにくくなるため、書陵部本の本文「きえしを（消えしを）」をとる。 ○からにしき 唐織の錦。中国から渡来した錦。歌では、多く紅葉のたとえとして用いられる。枕詞として「裁つ」「織る」「縫ふ」など、布に縁のある語や、それらと同音の語にかかる。○おのれ おのれから。ひとりでに。代名詞としての用例が多い。副詞的に用いた例として、「春風は花ちるべくもふかぬ日におのれうつろふ山ざくらかな」（続千載集・春下・一四四・参議雅経・建保四年後鳥羽院に百首歌たてまつりける時）がある。○らん 現在体験している事態について、その原因・理由・時・所・方法などを推量する意を表す助動詞。：ているのだからか。

【通釈】

紅葉を色鮮やかに染めた人（立田姫）は露のようにはかなく消えたのに、どうして峰には朝霧が立ち、その唐錦（紅葉）をおのれずから裁っているだろうか。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第十五、秋部六、六〇九三番

（紅葉）

百首歌中

惠慶法師

そめびとはつゆときえしをからにしき峰の秋霧おのれたつらむ

【考察】

初句「そめ人」は辞書類に立項されておらず、惠慶歌以外に用例を見出しえない。山を唐錦のごとく美しく染め抜いた人物。秋の女神、竜田姫（あるいは佐保姫も考慮すべきか。三〇〇（二二五））【語釈】および【考察】（参照）を暗示していると考えた。竜田姫は、奈良の都の西方、竜田山を神格化したものであり、陰陽五行説で秋は西の方角にあたることから、秋をつかさどる女神とされている。彼女の仕事は、紅葉を染め、「見るごとに秋にもなるかなたつたひめもみぢそむとや山もきるらん」（後撰集・秋下・三七八・よみ人しらず）、霧を生じさせ、「からにしき染むる山には立田姫きりのまくをぞ引きまはしたる」（増基法師集・四七・あけぼのにながめたちて侍りしに、きりのいみじうみるままにたちわたりて、そらに見ゆらんとまことにいひ侍りぬべかりしかば）、秋の終わり、西へ帰る際には木の葉を散らせる、「竜田ひめたむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ」（古今集・秋下・二九八・兼覽王・秋のうた）など、さまざまである。

第二句「きゝし」は書陵部本の本文「きえし」で解釈した。ここでは「そめ人」が露のように消えてしまったのとは対照的に、「みねのあさぎり」が立っていると考えたい。峰の朝霧は、「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ」（古今集・雑下・九三五・よみ人しらず）、「よのなかもさだめなければこの秋もみねのあさぎりたちやかはれる」（大斎院前の御集・一九六）のように、世の中のつらさを比喻した景物としても詠まれる。

なお「あさぎり」には「あきぎり」の異文がある。同様の本文の対立は、「からにしきをしくもあらず秋霧のたつひとからのたむけとおもへば」（西本願寺本能宣集・二五八）、「からにしきをしくもあらずあさぎりはたつ人からのたむけなるべしと」（書陵部本能宣集・一七二）との間にも見られる。惠慶歌の場合、「たつた姫おける物とやおもふらんあくればきゆる露のしら玉」（清輔集・一二二・露秋夜玉）と詠まれるような、朝が来ると消える露と、「あさひさすかがみの山はくもらねど峰のあさぎりたえずもあらなん」（惠慶集・六八・ある人のかがみのはこに）に見られるような、山頂近くにかかる朝霧とを、相前後して捉えたのだろう。とすれば、先の異文は、「あきぎり」ではなく、「あさぎり」である蓋然性が高いと思われる。

「つゆ」「からにしき」「あさぎり」など秋の景物を詠み込みながらも、秋をもたらしした竜田姫を「そめ人」と称し、そ

の正体を明示しない。そこに、惠慶の試みが認められようか。

二八 (二二三)

【本文】

あけかたのなかきあきのよひとりぬるよつまなにごと思いつらむ

【校異】 ○あきのよ―秋の夜(前) ○なにこと―なにと(前) ○思いつらむ―思ひとむらん(前)

【語釈】 ○あけかた(あけがた) 夜が明ける頃。「明け難(し)」との掛詞。 ○よつま(よづま) 忍び会う女。隠し妻。 ○らむ 眼前にない現在の事柄を推量する意を表す助動詞。今ごろは…ているだろう。

【通釈】

なかなか明けず、明け方の時間が長く感じられる秋の夜には、独り寝をする夜妻は今ごろどんな事を思い出しているのだろうか。

【別出】 なし

【考察】

秋の夜長、独り寝をする女性の立場になって詠んだ歌である。

初句「あけがた」は時間帯を示す語であるが、「明け」「開け」との掛詞として用いられる。「としくれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪」(後撰集・冬・五〇〇・よみ人しらず)、「あまのとおしあけがたの月みればうき人しもぞ恋しかりける」(新古今集・恋四・一二六〇・読人しらず)。惠慶歌では「明け難(し)」を掛ける。秋の夜の明け方を詠みこんだ歌としては、「秋の夜の月やをじまのあまのはらあけがたちかきおきのつりぶね」(新古今集・秋上・四〇三・藤原家隆朝臣・和歌所の歌合に、海辺の月を)がある。また、「秋」に「飽き」を掛けていると考えれば、三句以降へのつながり方も自然な流れとなる。

また、第三句「ひとりぬる」は、名詞「ひとりね」の形で「つま」とともに詠まれる。なかでも、「つまこふるしかぞなくなるひとりねのこのやまかせ身にやしむらん」(金葉集・秋・二二二・三宮大進・鹿をよめる)、「つまこふとしかなくときになりけりわがひとりねをたれにきかせむ」(忠見集・五七・やまざとなるをんな、しかのねをききて)など、妻問いをする鹿を題材にすることが多い。ところが、当該歌のように「寝」を動詞として用いて名詞に続けた用例は、同時代では「ひとりぬるかぜのさむさにかみな月しぐれふりにしつまぞこひしき」(好忠集・二九一・十月中)以外には見出せない。百首歌中しばしば見られる好忠歌との類似性を、ここでも指摘できるであろう。

そして第四句「よづま」であるが、いわゆる「妻」の同義語としての例は早く、催馬楽に、「いかにせむ せむや 鴛鴦の鴨鳥 や 出でてゆかば 親は歩く とさいなべど 夜妻さだめつや さきむだちや」(催馬楽・いかにせむ)と見える。一方、当該歌のような「隠し妻」の意の用例は、惠慶の時代に入り、「:ひとりふすまの とこにして ねざめの月の まきのとに ひかりのこさず もりてくる かげだにみえず ありしより うとむ心ぞ つきそめし たれかよづまと あかしけん:」(蜻蛉日記・五九・兼家)といった長歌にあり、また、「惠慶百首」中にも、ほかに「はまゆふのいくへか思ひたえぬらむほかねがちなる我がよづまは」(惠慶集・二七六・恋)という例が存するが、数としては極めて少ない。なお、院政期以降、平安末にかけての時期には、「君がためやよひになればよづまさへあへのいちぢにははこつむなり」(散木奇歌集・一四八・三月三日人のがりいひ遣しける)、「かこたれてたちかくるかなか人よいつかはききし人のよづまと」(林葉集・恋・八七八・失中人恋)、「わがこひはことにふれてもまさるかなくもるのかりはよづまならねど」(行宗集・三五一・寒雁増恋)、「あはづ野になくよのかずのつもれるは鹿もよ妻やつれなかるらん」(美国集・二一・鹿)といった例が散見される。

二九 (三三四)

【本文】

あきのよのねさめかちなるやまさとはまくらつとへにしかのみそなく

【校異】 ○あきのよ―秋の夜(前) ○やまさと―山さと(前)

【語釈】 ○ねさめかち(ねさめがち) 「がち」は接尾辞。しばしば眠りからさめるさま。寝覚めることの多いさま。

『日本国語大辞典』(第二版)の用例の最初は当該歌。 ○やまさと(やまざと) 山里の家。山家(やまが)。 ○まくらつとへ(まくらつどへ) 枕もとに集まること。『日本国語大辞典』(第二版)は、用例として『古今和歌六帖』三九九〇番(後出)のみを挙げる。 ○しかのみそなく(しかのみぞなく) 「しか」は「鹿」と副詞「然」との掛詞。

【通釈】

秋の夜、眠りから目覚めることがしばしばある山家では、枕元に集まって鹿が鳴くだけだし、私もそのように泣くばかりだ。

【別出】

『続詞花集』巻第四秋上、二一一番

(題しらず)

惠慶法師

あきのよのねさめがちなる山ざとはまくらつとへにしかのみそなく

【考察】

人里離れた場所で、熟睡できずに、長い秋の夜を過ごす孤独を、枕元に鳴く鹿の声に重ねた歌である。

第二句の「ねさめがち」という語は、惠慶の当該歌や、曾根好忠の「とけてすらぬるほどもなきさみだれをねさめがちにてあかすころかな」(好忠集・一三三・夏中、五月はじめ)、「ふたばにてめざししのであきくればよなかなになりてねさめがちなる」(好忠集・二二三・七月をはり)、「いとどしくよもながづきになりぬればねさめがちにてあかすべきかな」(好忠集・二四七・九月上)といった歌が早い例である。特に、『好忠集』に三首まとまって見られることには注意されよう。他にも、やや時代は下るが、「待ちえてもただ一こゑを時鳥ねさめがちにてあかすころかな」(公任集・五九・おなじ

心へほととぎすまつ心を、女御の御、「ぬばたまのゆめぢをたのむかひもなくねざめがちにもあかしつるかな」(重之子僧集・五一・かたらふ人のものへまかりにたるを、ながめはべりて)、「こよひしもねざめがちにてあさぼらけをのへのしかに秋をしりぬる」(道濟集・一五七・早秋十首)といった用例も見られる。

また、第四句の「まくらつどへ」という語は、『新編国歌大観』を検しても、「我がごとく物やかなしききりぎりすまくらつどへによもすがらなく」(古今和歌六帖・三九九〇・きりぎりす)という用例しか見あたらない。この歌は出典未詳歌であるが、類歌として、「秋の夜のおくるもしらずなくむしはわがごとく物やかなしかるらむ」(古今集・秋上・一九七・としゆきの朝臣・これさだのみこの家の歌合のうた)が挙げられよう。また、同じ敏行の歌に、「わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよただなくらむ」(古今集・恋二・五七八・題しらず・としゆきの朝臣)があり、『古今和歌六帖』歌と、第二句までが全く同一である。さらに、第三句までが一致する歌に、「わがごとく物やかなしききりぎりす草のやどりにこゑたえずなく」(後撰集・秋上・二五八・題しらず・つらゆき)が指摘できる。特に、『古今集』一九七番、『後撰集』二五八番歌が、身近で鳴く「きりぎりす」などの「むし」に、自分自身の物悲しさを重ね合わせている点、先の『古今和歌六帖』歌と共通する。つまり、この『古今和歌六帖』歌は、『古今集』以来の表現類型に依拠しつつ、あたりに響く声から感じ取れる「きりぎりす」との距離の近さを、「まくらつどへ」という特異な語を用いて表現したものと見られよう。

一方、恵慶の当該歌のように、山里で寝覚めに鹿の声を聞くという歌は、同じ恵慶の歌にも、「人もこずとなりたえたる山ざとにねざめのしかのこゑのみぞする」(恵慶集・一一九・へあふみに、ひらといふところに、人人まかりて、だいでもいだして、うたよみ侍るに)ねざめのしか)がある。また、やや後の歌にも、「ねざめしてひさしくなりぬあきの夜はあけやしぬらんしかぞなくなる」(道濟集・二〇〇・へ絵に、山ざとに…)秋のねざめ)などを見出すことができる。いづれも題詠であることから、こういった山里の状況が、歌に詠まれるべき内容として定着していたことが窺われる。すると、山里という場所柄、『古今和歌六帖』歌に見られる「きりぎりす」ではなく、「しか」が鳴くのを、ごく身近に捉え、

「まくらつどへ」と表現したところに、惠慶独自の面白味を見出すべきなのかもしれない。

なお、河原院を舞台に惠慶と交流のあった安法法師は、先の『古今和歌六帖』三九九〇番歌と初句・第三句・結句が同じ、「わがごとくものおもふべしきりぎりすぬともきこえてよもすがらなく」(安法法師集・一二・はる、ある人の題いだしければ きりぎりす)という歌を詠んでいる。そうすると、この『古今和歌六帖』歌は、第四句が惠慶歌と一致し、初句・第三句・結句が安法歌と共通することになる。表現授受の方向はにわかには決しがたいが、これらの歌の類似点は、『古今和歌六帖』と、惠慶・安法ら、河原院に集う歌人たちの歌との、表現上の密接な関わりを示している。

三〇 (二二五)

【本文】

わかいもとおもはましかはさほひめのそむるにしきをたちそおらまし

【校異】 ○おもはましかは―思はましかは(前) ○そむる―^{むるイ}そめし(前) ○たちそおらまし―たちきせてまし(前)

【語釈】 ○わかいも(わがいも) 上代において、自分の恋人や妻である女性をさす称。惠慶の時代には、すでに古めかしい印象をもつ語になっていたと推察される。具体的には、第三句に見える「さほひめ」を指すと見た。 ○おもはましかは(おもはましかば) 結句の「まし」と呼応して、現実でない事態を想像する。もし：であったら：であろうのに。

○さほひめ 佐保姫。佐保は現在の奈良市北郊の一带で、佐保山が平城京のほぼ東北に位置する。東は五行説で四季の春に相当するので、後に、春をつかさどる女神とされ、秋の竜田姫と対比されるようになる。だが、惠慶の時代には、まだ春の女神として定着しておらず、当該歌では、紅葉の錦を染める女神として、百首歌中の秋の歌群の最後に位置づけられている。詳しくは【考察】参照。 ○たちそおらまし(たちぞおらまし) 「た(裁)っ」は衣服を作るために布を裁断する意。また、「お(織)る」は、糸を機(はた)にかけて縦横に組み合わせ、布などを作る意。前田家旧蔵本「たちきせてまし」(錦を裁断して衣を作り、着せるだろうに)の方が、意味が通るか。

【通釈】

もしも（佐保姫を）私の妻と置いていたら、佐保姫が染めた紅葉の錦を、裁断して織るだろうに。

【別出】なし

【考察】

佐保姫を妻と置いていたら、という反実仮想の歌であるが、結句に異同があり、底本の本文では、歌意がとりにくい。

まず、初句の「わがいも」であるが、『万葉集』に用例が多いかと思いきや、確例は、「いも」に親しみを表す接尾辞「こ」の付いた「いもこ」の語形で、「和我伊母古我（わがいもこが）しのひにせよとつけしひもい」となるともわはとかじとよ」（万葉集・巻二十・四四〇五・朝倉益人）という歌が一首存するのみである。もっとも、西本願寺本の訓を見てみると、「あひみずてけながくなりぬこのころはいかによしゆきやいふかし吾妹（わがいも）」（万葉集・巻四・六四八・大伴宿祢駿河麿）、「をはりだのいただのはしのこほれなばけたよりゆかむこふな吾妹（わがいも）」（万葉集・巻十一・二六四四）、「いまはわれしなむよ吾妹（わがいもに）あはずしておもひわたればやすけくもなし」（万葉集・巻十二・二八六九）、「ひとごとのよこすをききてたまほこのみちにもあはずといふ吾妹（わがいも）」（万葉集・巻十二・二八七二）、「うつくしとおもふ吾妹（わがいも）をゆめにみておきてさぐるになきがかなしき」（万葉集・巻十二・二九一四）、「ねむころにおもふ吾妹（わがいも）をひとごとのしげきによりてあはぬころかも」（万葉集・巻十二・三二〇九）、「あすよりはこひつつゆかむこよひだにはやくよひよりひもとけ我妹（わがいも）」（万葉集・巻十二・三二一九）といった例が列挙できる（『新編国歌大観』の「現代の万葉学の立場で最も妥当と思われる新訓」（解題）では、いずれも「わぎも」。また、万葉歌人、山辺赤人の私家集の「源順らによって訓読された万葉集卷十の古点歌の一部」か（『和歌大辞典』「赤人集」島田良二氏）とされる部分にも、「むめのはなさきてちりなばわがいもとくみにこむとわがまつのみぎぞ」（赤人集・二〇五・まつによす）、「はるさめのやまずふりおちてわがこふるわがいもひさにあはぬころかな」（赤人集・二二三）、「あめつちとわけしときよりわがいもとそひてしあればかねてまつわれ」（赤人集・二七八）といった歌が見える。このように、用

例が、『万葉集』の代表的な旧訓と、歌を通じて恵慶と交流をもつ順・元輔・能宣・時文らが関与した訓の可能性がある『赤人集』に集中して見られる点に注意される。

次に、第三句の「さほひめ」に関しては、曾根誠一氏「紅葉」を染める佐保姫―「初期百首」時代の一動向―（『解釈』第五十卷第三・四号、平成十六年四月）に詳しい。春の女神としての佐保姫は、恵慶の時代にも、「さほひめのおりかけさらすはたのかすみたちきるはるののべかな」（古今和歌六帖・三二五四・はた）、「さほ姫の糸そめかくる青柳を吹きなみだしそ春のはつ風」（兼盛集・九三・先帝の御時歌合、三月卅日、右、青柳）というように見受けられる。だが、「佐保姫」そのものを詠み込んだ歌の嚆矢は、天曆二（九四八）年九月十五日庚申の夜に詠まれた「いくしほもしぐれはふらじさほひめのふかくそめたるいろとこそみれ」（陽成院一親王姫君達歌合・一一）である。「あきのはてのこころあるふるうたのかへしを左右として合はさせたまふ」と記されていることから明白なように、佐保姫はまず、紅葉を染める秋の女神として登場してくるのである。そして『好忠集』所載の「順百首」にも、「たれをしかゆきてみつらむさほひめのひとはをらせるやまのさかしき」（好忠集〈順百首〉・五〇六・秋十）といった、秋の佐保姫が詠まれ、さらに、応和二（九六二）年九月五日庚申の夜には、河原院で歌合が行われ、そこで、「さほひめにとひみてしかなわきてしもははそのもみぢうすきこころを」（河原院歌合・一九・佐保山紅葉浅）という、紅葉を染める佐保姫の歌が詠まれている。ちなみに、この『河原院歌合』一九番歌は、恵慶法師の「さほやまのなたてにうすきもみぢばをあたりのかぜはふきちらさなむ」（河原院歌合・二一〇）と番わされ、恵慶歌の勝となった。以上の用例から、「佐保姫が紅葉を染めること」は、恵慶や順ら、「いわゆる河原院グループ」の「共通理解となっていた」（曾根氏前掲論文）のである。秋の佐保姫の用例は、これ以後も、「さほひめのためおちにけるからにしきをれる木の葉のうへのしら露」（長能集・八〇・同じ院の、御手づからかみゑかかせ給ひて、人人に歌つけさせたまひしに、秋の前裁さきみだれたるもみぢおもしろき所に）、「さほひめのおれるにしきと見しものをいづれの神のむすびなるらむ」（大斎院前の御集・二四二・まつりのむすびからきぬを、左衛門督殿の北の方見たまはむとあればたてまつれたるに、返し給ふとてひもにむすびつけ給へる）などが見られる。

最後に、結句の異同について触れておこう。「たちぞおらまし」という表現は、『新編国歌大観』を検する限り、他に例を見ない。「たちおる」（裁ち織る）という語も、見出し得ない。一方、「たちきせてまし」の場合は、全く同じ句は見えないものの、「たちきる」（裁ち着る）という語ならば、「にしき」と組み合わせられて、「人しらでたちきる山のからにしきをぐらの山のもみぢなりけり」（元真集・解題一〈正保版歌仙家集本特有歌〉・らに）、「こきまぜの花のにしきをはるかぜにたちきてさとへかへるかりがね」（保憲女集・一六・正月のころほひ）というように用いられている。句の意も、こちらの方が通じやすいと思われる。

附記 本試注は、筑紫平安文学会で行っている『惠慶法師集』輪読の成果の一部である。春部については「〈惠慶百首〉夏部試注」（『純真紀要』第四十五号、二〇〇四年一月）を、夏部については「〈惠慶百首〉夏部試注」（『純真紀要』第四十五号、二〇〇四年一月）を参照されたい。なお、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.1.01を使用した。

- KUROKI Kaori (活水女子大学文学部現代日本文化学科助教授)
IMAI Akira (福岡女子大学文学部国文学科教授)
KOMETANI Etsuko (梅光女学院高等学校教諭)
TAKEDA Masayuki (九州大学大学院システム情報科学研究教諭)
TASAKA Kenji (福岡女子大学文学部国文学科教授)
NANRI Ichiro (純真女子短期大学現代コミュニケーション学科助教授)
NISHIHARA Kazue (福岡県立福岡中央高等学校教諭)
FUKUDA Tomoko (純真女子短期大学非常勤講師・福岡教育大学非常勤講師)